

《特別連載》

家族面接の実践から里親家族支援を考える

その1 ジェノグラム フリートーク (Zoom 開催)

早樫 一男

坂口 伊都

千葉 晃央

大谷 多加志

《はじめに》

「ジェノグラムを活用した相談面接入門（中央法規出版 2021年7月）」に携わった執筆メンバーを中心に、家族について理解を深めようという趣旨で「ジェノグラム フリートーク」を実施しました。誌上に載録したので、読者の皆様も、《ステップ》ごとに、ぜひ参加ください。

【参加メンバー】

進行：早樫一男（京都大和の家）

事例提出：坂口伊都（家族関係支援・相談援助 憩都） サポート：千葉晃央（京都光華女子大学）

コメント：古川秀明（ふるかわ家族カウンセリング研究所） 興津真理子（同志社大学）

寺本紀子（寺本社会福祉士事務所） 中谷陽輔（京都大和の家）

《ステップ①》

□家族情報から考える 「父 30代後半 母 40代半ば 長女 中学2年 長男 小学6年」

◆読者のみなさまも、まずはこの家族情報からこの家族について思いを巡らせてください。

進：家族情報からまずは考えてください。ちなみに、父と母の年齢差はどれぐらいですか？

提：5歳ぐらいです。

○：ご夫婦が5歳ぐらい離れていて、母が上というのが、「ほお」という感じになるなぁと思いました。

T：母が再婚なのかなって…。二人の子どもたちを連れて、5歳ぐらい年下の男性と再婚したのかなと思いました。

N：父が若いなと…。Tさんの話を聞いて、再婚と言われればそうかもしれないと思いました。私も同世代ですが、中学生の子どもがいるって結構少なくて…。

F：どれぐらい前の時点での情報なのかが気になりました。年の差については、今の家族だったら違和感ない。10年ぐらい前なら意味合いが変わってくる。20年前でもまた意味合いが変わってくる。父が20代半ばぐらいで長女が生まれたというのは、今だったら早いのでしょうか。僕らの時代だったら、割とあったかなという感じもする…。

《ステップ②》

進：「この家族情報はどれぐらい前ですか？」という質問がありましたが、今から9年前ぐらいです。この時期に養育里親として、子どもを預かってみようという話が出てきたとのこと。

◆この追加情報を聞いて、読者のみなさんはどのようなことを思い浮かべますか？

F：長女、長男も養育里子の可能性もあるということでしょうか？

提：里子ではないです。実の子どもさんです。

F：誰が主導で養育里親のことを決めたのか、父と母と二人で決めたのか、母がやるって言うんで、父もそれに賛成したのか、決定権に興味を持ちました。

進：家族の中の決定権はどう思いますか？

F：年齢差から見たら、決定権は母みたいな感じはします。父は「君が決めるなら、それでいいよ」みたいな感じかな。子どもたちがどういう意見を出すのかも興味深い。長女は思春期でしょう。長男も思春期を迎える時期なので、いくつぐらいの子を里子として預かるかというのも課題と思う。それに、家族の相談力と言うんでしょうかね、ものすごく必要になると思います。反対する人は一人もいないのかということも気になりました。

進：決定権や子どもらの思いが話題になりました。他の人はどうですか？

T：母が思って、家族に相談したと思います。母が可愛がっていた後輩が病気で亡くなって、その人の子どもが施設に預けられるという話になっているのを聞いて、「養育里親を始めて、その子を育ててみたい」と母が言い出した物語を想像しました。というのは、「里親を始めたい」というのは突然、言い出す話でもないから、何か強烈な出来事があって決心したというか、一大決意をして家族に相談したのかなと…。

F：今の仮説は素晴らしいですね。物語性があって、その続きも聞きたくなりました…。

進：なるほど。母の思いというか、物語があったんじゃないかと…。

O：私も母かなって考えたんですけど、父からというのはどんな時にありうるだろうかということも考えてみました。例えば、専門職で働いていて、里親に関心を持っておられて、「是非この機会に！」という強い希望を持たれたということもあり得ると思いました。子どもたちはどんなことを思うのかなと考えたら、「男の子がいいとか女の子がいいみたいなことを言ってもいいのかな」「何歳ぐらいがいい」「子どもの希望はどれぐらい反映されるのだろうか」など、思いそうな気もする。また、「どうなるのかな」と、子どもたちの気持ちはザワザワするなって思いました。

進：迎え入れる側の子どもとして、自分たちの意見はどんな風に伝えたらいいのかと思うかもしれない。子どもたちは、どんな希望を持つと思いますか？

O：どうですかねえ。自分より小さな子が来るとイメージするかなあ。「そうだといいな」と思いそうな気がします。自分たちより上の年齢とか近い年齢の子が来るとかは思いもよらないという感じがしました。

N：母がパワーを持っていそうなイメージがありました。その理由として、再婚でなければ、父は20代半ば、母は30歳前後に結婚。その後、出産とすれば、母がパワーを持っていそうと思った。追加情報で9年ぐらい前という事でしたが、その時期に養育里親を知っているということは、何らかの専門性がある方なのだろうなあと思いました。里親って、養子縁組を前提に、「お子さんが欲しい」というのが多いと思う。「養育里親

を始めたい」と相談されているということは、母には何らかの思いがあるからなのかなあと…。また、母は里親のことも説明する力があるのだろうか…。母が家族に相談するってことは、相談が受け入れられる見込みがあった家庭というか、家族の仲は悪くないのかなとも思いました。

進：突然ですが、提出者やCさんにここまでの感想を聞いてみようと思います。

C：人柄とか人格とかじゃなくて、いろんな環境が重なった中でどう生きるかみたいな感じで、人って生きているのかなあとということを思いながら聞いていました。

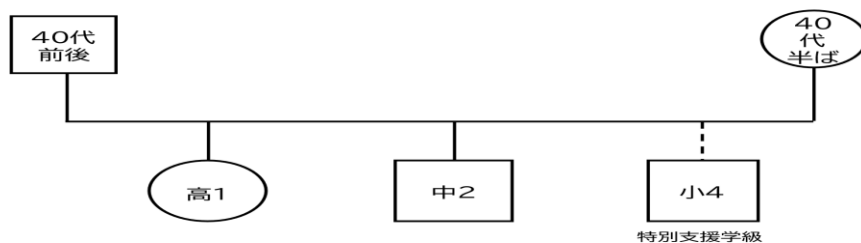
提：面白いなあと思いながら聞いていました。20代半ばの父と30歳前後の母。母にパワーあるというのが、なるほどねと思いながら聞いていました。子どもたちは自分たちよりも年下という条件を出したと聞いています。

進：みなさん、ありがとうございます。実はここまでは、準備運動みたいなもので、ここからが本番です。ジェノグラムを見ていただいて、いろいろと思いつくことを喋ってもらおうと考えています。

《ステップ③》

◆読者の方も次のジェノグラムを見ながら思いを巡らせ、さらに各コメントにも目を通してください。

ある家族に思い巡らせる



提：このご家族に里子が来た時期のジェノグラムです。小4（9歳）の里子は特別支援学級に在籍です。

進：ステップ①の情報の時期から2年余り進んでいます。里親の認定前研修や認定、里子の候補との出会いや交流などがあり、実際に里子を預かった時点でのジェノグラムです。このジェノグラムを見て、父、母、長女、長男、里子、それぞれの思いや家族全体について思うことを喋ってください。

O：里子は実親とはもう会わないという感じですかね？

提：親御さんとの交流は、ほとんどなかったそうです。

O：里親宅と実親宅を行ったり来たりするのは、結構複雑過ぎて、しんどいなと思いましたので、ずっとここなんだという方が里子自身の安定感、安心感が確保できるのだろうと考えました。一方で、上の二人がどんな気持ちでいるのかと思うと、里子とどう関わるかといった戸惑いもあると感じました。子ども三人は高校、中学校、小学校と皆違うので、何となくコミットしづらいかと…。

進：なるほど。三人はなかなかコミットしづらいか。

O：小学校同士だったら何か一緒にするとか、共通の話題があるかなと思ったんですけど、それぞれ活動する世界が違って不思議ではないという気がしました。

T：「この子を里子として迎え入れたい」というより、「里親になりたい」という気持ちが先にあると、この子を

選んだという順番かなと思ったら、親たちに何らか、里親になりたい動機があるのかなと思いました。例えば、母は子どもたちと関係する専門職で、いろいろ困難な状態にある子どもたちをいっぱい見ていて、翻って自分の子どもたちを見てみると恵まれているなど…。だから里子を預かって、「世の中のことを子どもたちに学んで欲しい」というような動機があったのではと思いました。

進：小学生の男の子が一人家族に加わったということについて、皆それぞれ、どんな感じで迎え入れたのかなあと思うのですが、その辺りはどうですか。

N：家族として養育里親になるというのはすごい覚悟でもあると思う。養育里親になろうとしたのは誰かということについては、今の時点ではわからないにしても、受け入れた家族メンバーは、ある程度は納得するまで話したと思う。一方で、実際には思っていたのと違うという感じが出てきても不思議じゃない。誰が解消役になったのか…。仮に母が進めた場合でも、夫婦で支えあってという感じだとすれば、父が仲介役とか、子どもらの不満の受け皿となっていたのかもしれないと思った。また、妻の相談役になっていたのかもしれない…。子ども視点になれば、長女と里子との距離感は微妙で気にすると思う。また、小学生の課題がある子を養育里親として受けてくれる人ってかなりレアではないかと思う。幼児さんぐらいを受け入れることが多いのではという印象がある中で、よく受けはったと思う。実際に受け入れると、思っていたのと違うといういろいろな人が感じたかもしれない。大変だったと思うし、大変さを誰が緩和してくれたり、中和してくれたのだろうと思いました。

F：里子を受け入れようと思う物語がわかりにくいので、Tさんのストーリーはわかりやすいと思った。子どもがいないご夫婦が、里子を迎えるっていうのは割とわかりやすい。既に実子が2人いてその上で里子を迎える動機がわからないなあとあって、今頭の上にクエッションマークがいっぱい出ています。

進：実子を育てる中でさらに子どもを預かろうというには、それなりの思いがある。例えば、広く社会の役に立てればとか…。何らかの事情や経過がある子どもを預かろうと思う方の物語や思いはとても大事になると思います。

T：家族はそれなりの心構えを持って里子を預かる合意をしても、実際に預かる時点では、子どもたちも含めて、迎える準備ができていたのかを知りたかった。母が恵まれた我が子たちにいろいろ世間のことを知って欲しいと思って、困難な子を預かろうとしたという私の発想だと、家族の合意がしっかりとできて、準備がある程度できていないと預かれないだろうと思った。

進：一定の合意はあったと思うが、一方で、どこまで具体的なことをイメージできているかは微妙なところもあると思う。里子を預かり、一緒に暮らすという父母の思いと長女長男が年下の子どもと一緒に暮らすという思いや物語と現実とは必ず一致をしているとも言えないかなと…。子どもたちなりにどこまでイメージできているかというのは、子どもたち三人の年齢とか思いも含めてなかなか微妙かなと…。提出者から感想などがありますか。

提：聞いていて感じたのは、やはり家族にスポットが当たるんだなあ…。長女、長男の思いはいっぱい出てきたけど、里子の思いってあまり出てこなかった印象があって、里子の思いをどう思うかを聞いてみたいと思いました。

進：里子の思いについてはどう思いますか？ちなみに、里子はこの家で預かってもらう前には、ご家族との顔合わせや宿泊体験みたいなことは当然やっています。

N：里子さんは思っていたことがどうだったのだろうか、どこまで想像していたのか、想像できる能力があったのだろうかなど、思いました。実際には、思っていたのと違う感はあるだろうなあ、孤独感もあっただろうなあとも思いました。里親宅で生活するって言われて、イメージできる方が難しいだろうな。思っていたのと何がどう違うか、本人も言語化しにくいし、誰がその思いを汲めるのかっていう課題もあるだろうなと…。さらに、共有している家族の歴史が違う。里子が来る前の10年前に行った遊園地の思い出はこの子にない。家族の歴史が違う9年間があったことも、誰がどのように穴埋めできるんだろうかと…。誰かが仲介してた

らいいけれど、偏っちゃうと負担だろうと思う。思いを汲む人が家族内にいたのであれば、孤立しないかもしれないって、そんなことを思いました。

O：どういう風にしてここに来ることになったのかみたいなことは、里子さんにはやっぱりわからないままじゃないかと思いました。長女や長男がどう関わってくれるかによっても居心地は全然違うだろうし、そもそも、二人をどのように呼ぶのか等、とても戸惑ったような気がしました。

T：私も同じようなことを思いました。この子はこの家で生活するということを一応承知してきているのだけど、一般的な家族像を描くというのは想像しにくいと思った。ここまでにいくつかのマッチングの場面があったかもしれないと思うが、その都度話が成立せずに、この家族は受け入れてくれるということになって、「試しに行ってみようかな」という気持ちで里親宅に行ったのかなと想像しました。父や母、姉や兄ができるっていう過大な期待は持たずに…。だから、そんなに失望もないのかなってというような感想です。

F：この子の生育歴の中で、産みの親の記憶を持っているのかどうかというのは気になります。自分の親の所に戻りたいって俺だったら思うのかなあって…。でもその親がボコボコボコボコ虐待してほんまに恐ろしい目にあっていたら、逆にまた新しい家に行くのも怖いなあとも思うし、そうやって思うとさっぱりわかりません。

進：限られた情報しか出していない中でフリーに喋ってもらっているのですが、その後のことを喋ってもらいます。

提：この子は中学では特別支援学校の方に進んでいます。家の中ではお金の持ち出しがあり、急にいなくなったりとか、いろんな事が起きました。行動が大きくなるとやっぱり振れ幅も大きくなる。警察に捜索願を出しに行ったり、いろんな事が起きて、結局、一家庭でこの子を守るということが非常に難しくなり、中学生の途中で、この家から離れることになりました。その時には、「いやや、離れたくない」ということでしたが、結局、施設で生活することになりました。現在、この家族はボランティアという形での面会交流を継続中です。

進：今回、皆さんにどんな風に考えますかと投げかけてみようと思ったのは、里子を受けた家族の中で、どんなことを思ったり感じたりしていたんだらうなあということを想像するかを聞いてみたいと思ったからです。4~5年、一緒に暮らす中で、しんどくなった、難しくなったということがありますが、家族それぞれの思いやどんなことが起こっていたのかなあということ、また、どんな手助けがあったらこの子も含めて、このご家庭の生活を続けられたと思うのかということも聞いてみたいと考えました。この年齢の里子を受ける時に、この里子はもちろん、家族にもどんなサポートがあったら良かったのだらうというようなことも含めて思いつくことを喋ってください。

N：この子をご家庭からいなくなった時のそれぞれの気持ちとどういったサポート支援があればそういうことにならなかったということですね。それぞれ思いはあるし、里子さんが来た時にそれぞれなりに決意はあったり、覚悟はしていたと思う。望んでいた結果ではなかったらうなと思うとやっぱり、悔しさとか悲しさとかもあるし、いろんな複雑な気持ちがあるんだらうなあって思いました。本人も含めて、どういったサポートがあったらということですけど、この子の思いを代弁してもらったり、腑に落ちる形で対応してもらえる存在があればと思ったが、実際には難しかったのだらうなと思う。

T：預かる前の合意というのを最初にちゃんと作るというのは難しいなというのはわかったんですけど、実際にこの子が家に来て以降、次から次にいろんなことが起きますよね。実子でもいろんなことが起きる。ステップファミリーも…。けど、養育里親っていうのはもっと難しいなと思いました。本当の親子になるわけでもないし、籍も入らない。この子の場合は3番目の子どもとして、新しい家族を作り出すという覚悟とか、作り出すプロセスに支援が入ることがなかったのかなという感想を持ちました。早樫さんが家族面接や造形法をするとか、何か新しい家族作りをする支援、家族システムに関わるような支援があれば、問題はたびたび起きるのだらうけど、起こるたびにそれを家族で話し合っていくということができていったら徐々

に家族になっていったのかなと…。里親のサポート体制ってまだまだできていないと思うので、養育里親制度を進めていくのであれば、そこら辺をちゃんと整備してやらないとこのような結末が量産されていくという感想です。

O：本当に難しいなと思っていて、こうなってみるとやっぱりなぜ里子を引き取ろうと思われたというところに戻っちゃうと思いました。里親を始める時に、こんな困難があるということがどんな風に知らされるんだろうなと…。どんな風に里親教育みたいな感じができるんですかね。困難をどう超えていくかというところを、何かある都度、話をしていくとか、そういうところに支援がないとやっていけないって思いました。また、9歳の子の異質さみたいなものを埋めるっていうのが、この年齢からだとすごく難しいなあというのを思っていました。もしかしたら、小さなお子さんを引き取ることは、親御さん自身の年齢的なことも考えて避けはったのかなと…。あまり年齢の下のお子さんを引き取るのは止めようかというような相談はあったのかもしれないと思っていて、いろんな事が絡んでこうなったのだと思うけども、つながりが切れない形でボランティアをされているところが親御さんたちの誠意だなと感じています。

F：一番の感想はナイスチャレンジだと思ったことです。普通、なかなか里親をやろうと思わないだろうから、やろうとする優しさと思いやりみたいなところは120%尊敬します。どんなサポートがあったらいいかと考えたのですが、里子を預かってからの4～5年の間には、長女も長男も進路の時期が入ってくるし、そうなると親御さんもそのサポートというのはとても必要になる。そうなった時にこの子がちょっと寂しい思いした可能性はあるかなと思った。それから家族だけに閉じないシステムというかサポートも必要やったのかなと思いました。

進：ありがとうございます。Cさんが喋って、提出者さんに喋ってもらってひと区切りにします。

C：やっぱり皆で考えるというのが大事だなと改めて思っていました。

提：ありがとうございます。里子は産まれてすぐ乳児院に入った子で、「家庭を全く知らないから家庭というのをこの子に味合わせてやりたい」という思いでのつながりと聞いています。長男はお兄ちゃん役として、この子と向き合おうと頑張っていたのですが、やっぱり里子自身の課題もあり、長男はフェイドアウトしていったという感じです。長女は家族の救世主みたいな役割になってしまったので、間をとりもったりなど、しんどい面があったというのが後からわかったとのこと。放課後デイサービスも使っていましたし、ガイドヘルパーも使っていたようです。小学校の先生とはすごく連携が取れて、「お母さん大変ね」って言われながら綱渡りのようにやっていけたようですが、中学2年になったら、学校ではOKだけど、放課後デイサービスではダメ、家でもダメと言われるという状況で上手くいかなくなって、試し行動みたいなのがドンドン大きくなっていったとのこと。連携ができていないかとか、その子を見る眼差しが同じか同じでないかっていうことによって、崩れてしまうということや、家族は迎え入れるつもりでいたのですが、家族バランスが全部焼野原になっていったと聞いています。ナイスチャレンジと言われたことは伝えておきます。救われた思いになるんじゃないかと思いました。

進：今の話を聞いてこれだけは伝えておこうということがあればよろしくお願いします。

O：苦労をされたにも関わらず、切れずにつながっておられるというところにすごく希望を感じています。すごいエネルギーを使って、関わっておられたんだと思いました。

T：小4から中2までという年月を一緒に暮らしていたんですね。すごいなって…。そこまで上手くいって、いろんな関係者との間でガラガラと崩れていった無念さみたいなものとともに、何年かやれていたというのを聞いてよかったです。本当に素晴らしいチャレンジだと思います。実行したご夫婦やご家族は凄いなと思います。

N：こういった課題や年齢の子を受け入れてくれる里親さんってなかなかいないと思う。家族の歴史をどう作っていくか、トラブルを乗り越えることも含めて、大変な中をよくチャレンジされたなって…。この子は里親家族と出会えて幸せな面があったと思う。思い続けてくれる人がいるとか、形は離れたとしても、どんな形

でも関わろうとしてくれる人がいること自体がこの子の人生にとって幸せなことと思う。そんなことを伝えたくまりました。

提：生活をともにしていた時間があるからこそ、今会うとお互いにもものすごくいい関係のようです。この子にとっては、適当に甘えられる存在であり、元里親としても可愛い存在のようです。時間も区切られている中でもものすごくリラックスして会えるっていうのは、あの生活があったからできているんだなあっていうことを私も感じています。

F：先ほどのジェノグラムを見た時に、母はきっと北川景子さんみたいな素敵な人やろうなと思った。福祉や心理の専門職って、理屈ではあれこれ言うと思うんです。でも、この子を預かりたいと思いを形にしたっていうのが素晴らしいなあと思いましたね、ご主人はたぶん反町隆史さんみたいな頼りがいがある人なんやろうなと思います。

進：提供者から最後に一言どうぞ。

提：今回事例を提供して、いろいろと相談にのる形で関わってきた私も凄く救われたなって思っています。ありがとうございます。

進：2時間、ありがとうございました。

《あとがき》

この間、国は里親委託を推進している状況を踏まえ、里親家族に焦点をあてたジェノグラムフリートークを実施しました。ちなみに、就学年齢後の里親委託は、「中途養育」と言われることがありますが、就学後の里子を受け入れた里親に対する支援に関わる課題は少なくありません。家族全体の構造や機能を視野に入れた支援は十分ではありません。今回のフリートークで出てきたキーワードとしては、「家族の歴史」への視点の大切さと歴史のギャップを埋める知恵や工夫です。また、「きょうだいサブシステム」への視点も重要なポイントです。この2点は、ステップファミリーとも異なる里親家族の特殊性と考えられます。

里親がわが子を育てた（育てている）といった子育て経験の有無に関わらず、里親支援担当者は里子を受け入れる前の「家族の多面的理解」と受け入れ後の「家族の発達」への視点や支援のスキルが何よりも必要ではないかと感じた次第です。

★次回掲載予告★

今回のジェノグラムフリートークを踏まえて、「里親家族の支援に何が必要か！」というテーマ（仮）での意見交換を掲載予定です。